

ストラスブール美術館所蔵

語りかける風景 —コロドー、モネ、シスレーからピカソまで—



クロード・モネ「ひなげしの咲く麦畑」1890年

特別陳列

徳田八十吉三代展

夏休み親子で楽しむ美術館

ふしぎがいっぱい

大名家の調度

古九谷・再興九谷名品展

- 8月の企画展示室
- 企画展Topics
- 当館の作品が見られる展覧会
- 行事案内



三代徳田八十吉「耀彩多面壺・恒河」個人蔵



吉田富士夫「交霊術・HARP」

語りかける風景

—ココロー、モネ、シスレーからピカソまで—

主催：北陸中日新聞・石川県立美術館・石川テレビ放送
後援：フランス大使館・石川県・石川県教育委員会・金沢市・金沢市教育委員会
NHK金沢放送局・エフエム石川

7月22日(木)～8月23日(月) 会期中無休

1F企画展示室

ストラスブールはフランス・アルザス地方の中心都市で、古くからドイツとフランスが領有権を争った土地として、また大聖堂のある旧市街が、ユネスコの世界遺産に登録されている、歴史都市として知られています。ここには優れたコレクションを持つ、先史時代から現代までの美術品を網羅した十館もの美術館があります。

日本では早くから風景画が絵画の一ジャンルとして認識されており、江戸時代の浮世絵で一つの頂点を迎えました。ヨーロッパでは宗教画から風景だけが独立して、美術の主題となるまでに、さらに多くの時間を必要としました。この展覧会では、ストラスブール美術館のコレクションの中から、ヨーロッパの風景画にスポットを当て、近代西洋風景画が発展していく過程を、ココロー、モネ、シスレー、ピカソらによる十八世紀から二十世紀までの八十点余りの作品を通して紹介するものです。

展覧会は、次の六つの項目で構成されます。

I 窓からの風景
室内から外へと向かいつつある画家のまなざしに注目し、背景に開かれた窓から見える風景や室内に降りそそぐ外光が、作品のテーマに関わる作品を紹介します。

II 人物のいる風景
風景が作品の主題を構成する重要なモチーフの一つとなり、描かれた人物や画家の心情、意図などを伝えている作品を紹介します。自然を支配しようとするヨーロッパ的な視点が感じられます。

III 都市の風景
都市を描くことで、人々の営みを表しています。画家が感じ取った、古い価値観の重圧からの解放感と同時に、人間の営みの移ろいややすさをも表現しています。

IV 水辺の風景
光や水を描くことで、画家は常に変化する風景の一瞬を捕らえ、その美しさに解放感や不安感を投影しています。この中に二十世紀半ばの抽象絵画の萌芽を見ることが出来ます。

V 田園の風景
自然と都市の中間に位置する田園は、近代絵画の主要な主題となりました。時代の大きな流れであった十九世紀の自然主義を受け、風景そのものを尊重した作品が多く生まれました。

VI 木のある風景
風景の中から、特に木を主要なモチーフとした作品を紹介します。画家たちは木の持つ生命力や造形的な美しさに注目し、さまざまな作品に昇華させています。

観覧料

一般	個人	前売・団体
一、二〇〇円	一、〇〇〇円	
大・高校生		
七〇〇円	五〇〇円	
中・小学生		
五〇〇円	三〇〇円	

※団体は二〇名以上
当館友の会会員は団体料金



ギュスターブ・ブリオン「女性とバラの木」



ジャン・バティスト・カミーユ・ココロー「朝の香り」

学芸員の眼



二代徳田八十吉「秋映飾皿」
小松市立博物館蔵



初代徳田八十吉「古九谷写意粟葉丸九角皿」
能美市九谷焼資料館蔵

九谷の陶芸界を代表する徳田家は、藩政時代からの九谷の伝統を受け継ぎ、初代・二代・三代とそれぞれに個性的な作陶を行い、現代における新しい表現を追究してきました。

初代八十吉氏（一八七三～一九五六）は、古九谷以来の色絵技法を継承発展させ、深厚釉、碧明釉など独自の釉薬を開発し高く評価されました。また二代八十吉氏（一九〇七～一九九七）は、初代や富本憲吉に師事し、釉薬の調整や絵付けの表現技法に現代的な創造精神を盛り込み活躍しました。そして三代八十吉氏（一九三三～二〇〇九）は、祖父の初代から上絵の具の調合法を学び、色釉の濃淡の微妙な変化の美しさを器面全体に施した彩釉の技法を展開し、重要無形文化財保持者の認定を受け、現代九谷の陶芸界を牽引してきました。

一般に九谷焼の特徴の一つは、その深く華麗な色彩にあるといわれますが、徳田家においては、初代・二代・三代とそれぞれにその色にこだわり、伝統をいかに受け継いでさらにそれを展開させていくかが、大きな課題であったと思われる。とりわけ、三代八十吉氏の表現は、現代九谷の陶芸界に新風を吹き込む斬新な手法で注目されてきました。線で形を取り、その内側に色彩を充填するという旧来のやり方を脱し、線を使わず色面の変化のみで表現する意表を突いた発想は、作家の柔軟な感性の表れともいえるでしょう。また一方、そこに見られるにじみやぼかしの効果は、水墨画などにも通じるわが国の伝統的な造形感覚の継承といえるかもしれません。

代、二代の作品を併せて三人の代表作約六十点を展示し、あらためてその創造の軌跡を回顧するとともに、優れた技と美の世界をご覧いただくこととするものです。

■講演会

演題／「九谷陶芸界における徳田家三代」

講師／嶋崎 丞 当館館長

日時／八月一日（日）午後一時三〇分～

会場／美術館ホール 「聴講無料」

■ギャラリートーク

講師／四代徳田八十吉氏

日時／【第一回】七月二十四日（土）

【第二回】八月二十一日（土）

いずれも午後一時三〇分～

会場／第6展示室 「要観覧料」

特別陳列

徳田八十吉三代展

7月22日(木)～9月7日(火) 会期中無休

第5・6展示室

ふしぎがいっぱい

7月22日(木)~9月7日(火) 会期中無休

第4展示室

学芸員の眼

昨年度もご紹介した、おしゃべりしながら鑑賞する対話型鑑賞は、作品や作者についての一方的な解説ではなく、コミュニケーションを通して行う鑑賞方法です。作品を見て感じた子どもたちの考えを大切にし、作品への興味へと導くこの鑑賞方法。まずは、「作品の中に何がみえる?」と子どもたち自身が作品の中から発見したことから話を始めます。そして、「どうしてそう思ったの?」と子どもたちがどんなふう感じたかをもとに会話をしながら鑑賞していきます。展示期間中の八月八日(日)には、キッズプログラム「キッズ☆ふしぎハンター」と題して、この「ふしぎがいっぱい」の展示室での対話型鑑賞を含めた鑑賞会を行います。おしゃべりOKのちょっぴりにぎやかな鑑賞会、ご参加をお待ちしております。

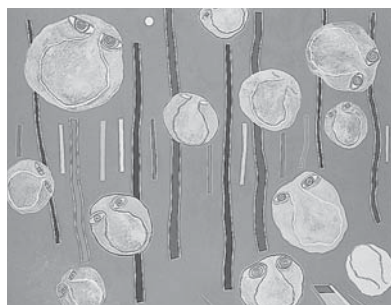
夏休みの特集展示「夏休み親子で楽しむ美術館」。今年度のテーマは、「ふしぎがいっぱい」。美術館の所蔵している作品の中から、「ふしぎな生き物やモノ」「ふしぎな風景」「ふしぎな場面」などを表現した作品を集めてみました。

展示会場となる第4展示室には……人の顔や風景を、どうしてこのように描くのだろうと思うような作品。意外なテーマやモチーフに驚くような作品。この作品は何を表しているのだろうと考えこんでしまうような作品など、ふしぎな作品がいっぱいです。

自分や友だちの描き方とは違う、見方が違う、考え方が違う「ふしぎ」な作品の数々……。このように、「ふしぎがいっぱい」の展示室は、いろいろな考え方や感じ方と出会うことができます。

みんなの顔が違うように、人の感じる心もそれぞれ違います。同じ作品を目の前にしても、「どこがふしぎなのか」「どうしてふしぎなのか」について思っていることは、それぞれ違うかもしれません。今回の展示も昨年度の「親子でつむぐ22の物語」に引き続き、親子や友だちと「ふしぎ」についてたくさんおしゃべりしながら鑑賞していただけたらと思います。誰かとおしゃべりしながら作品を見ると、一人で見ていたよりも、きつとその作品についていろんなことが見えてくることでしょう。

さあ、夏休みのひととき、いろいろな「ふしぎ」と出会って、その「ふしぎ」のわけを自分なりに考えたり、また、家族や友だちと話し合ったりして「ふしぎ」を存分に楽しんでみませんか?



畑 尚治「己曼茶羅一樹間」

古九谷・再興九谷名品展

7月22日(木)～9月7日(火) 会期中無休

加賀藩三代藩主前田利常は、政治的に屈従を強いられた無念を晴らすかのように、文化政策において幕府に対抗心を燃やした大名でした。そして名品の収集や名工の招聘とともに利常が意欲的に取り組んだのが、江戸ではできない色絵磁器の生産でした。中国で確立された色絵磁器の技法は徐々に日本にも伝えられ、十七世紀にはいると本格的な生産体制が整備されていきます。前田利常は有田地区の動向にいち早く注目し、人的交流によって技術の移転をはかり、やがて十七世紀半ば、加賀南部の九谷の地に色絵磁器の生産拠点を確立します。そしてそれから約半世紀間に、今日古九谷と呼ばれている独自の色絵磁器がここで生産

されます。古九谷色絵の特質は、豪放華麗な意匠感覚にあります。古九谷の色絵、青手の両様式には、中国の景德鎮五彩や華南三彩の影響が認められますが、意匠感覚は斬新であり、日本や中国のみならず、西洋の文物も熱心に参照しています。こうした姿勢が前田利常の文化人としての「好み」であり、また幕府に対する反骨精神の表明と考えることができます。このように、古九谷の意匠は加賀の文化風土と密接に結びついて誕生し、若杉や吉田屋など再興九谷諸窯にも継承され、さらに明治時代以降今日に至るまで作家の精神的支柱となっています。



「青手葡萄図平鉢」古九谷

大名家の調度

7月22日(木)～9月7日(火) 会期中無休

前田育徳会が所蔵する調度品の中から、大名家に相応しい格式ある調度品を選んで約二十件を展示します。書院の床を飾る絵画をはじめ、刀掛や碁盤・将棋盤、さらには十三代前田齊泰に嫁いだ溶姫の婚礼調度品等の漆芸台品を中心とした内容です。

花鳥図 王若水筆

三幅対の中幅に松竹梅と番の丹頂鶴を描き、左右幅にはそれぞれ春秋の季節を表す牡丹に禽鳥、菊に禽鳥が、確かな筆致と鮮やかな彩色で描かれています。花鳥画が意味する不老長寿や夫婦和合、子孫繁栄などを示す吉祥図として、大名家の書院飾りにふさわしい大幅です。作者は中国元時代の画家で、花鳥画を得意としました。

越中愛本橋図 佐々木泉玄筆

この橋は、五代藩主前田綱紀により架けられた橋です。寛文元年(一六一六)、初めて江戸より金沢へ下る際に、黒部川が難所といわれ、しばしば氾濫し、橋が無くて村人や旅人が困っていることを知り、架橋を命じたのです。老臣たちは防備上や難工事の多額の経費に難色を示しますが、綱紀は人々の生活を重視したのです。長さ三十三間の美しい勿橋(橋脚を用いない工法による橋)は翌年完成し、「愛本橋」と名付けられました。この綱紀の善政を讃えるため、後に加賀藩御用絵師佐々木泉玄に描かせたものです。現在の橋は十二代目で、黒部市では旧愛本橋の復元を目的とした調査が進められているようです。

「越中愛本橋図」佐々木泉玄筆

第7展示室

石川県写真家協会展 「創・景・美」石川

8月27日(金)～8月31日(火) 会期中無休

◇入場無料
◇連絡先

石川郡野々市町下林四―二八八―二
池田紀幸写真事務所
TEL 〇七六―二四八―六七六〇

石川県写真家協会は、石川県を中心に活躍するプロ写真家の集団です。これまでも写真展や講習、ゲストを招いての講演など、毎年様々な活動をしております。
また、今回は協会創立三十周年を迎えるにあたり、記念事業として石川県への回帰をテーマとした写真展を開催いたします。写真家たちが石川県の伝統、工芸、情景、料理などを斬新な目線と感性で切り取り、新たな石川県の魅力を創造いたします。
この機会にぜひご来場ください。

◇入場無料

◇後援 北國新聞社・テレビ金沢・北陸放送
◇連絡先 金沢市泉野出町二―六一―九
二紀北陸支部事務局 六反田英一

TEL 〇七六―二四三―〇八八二

二紀会は「類型化を排する。具象・非具象を論じない。創造的な個性の発現を尊重する。情実を排し新人を抜擢し、積極的に世に送る」の主張を掲げて昭和二十二年以来六十四年活動を続けています。北陸二紀展は春の北陸二紀展に続き二紀会北陸支部会員が、第六十四回二紀展に向けて制作した作品を展示いたします。あわせて、企画として石川県出身の二紀会常任理事・事務局長の立見榮男先生の作品を特別展示いたします。

2010 北陸二紀展

8月27日(金)～8月31日(火)会期中無休

午後6時で閉室。(31日のみ午後5時で閉室)

第8・9展示室

第3展示室

主な展示作品

7月22日(木)～9月7日(火)

坂根克介「中国服」



高光一也「裸婦」



【油彩】

鴨居 玲
高光一也
宮本三郎

【肖像】
【裸婦】
【牧歌】

【日本画】

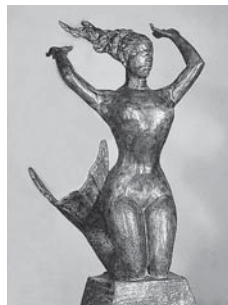
梅川三省
坂根克介
下村正一
原田太乙

【海の伝説】
【中国服】
【集まる】
【寂寞】

【彫刻】

畝村直久
松田尚之
中村晋也

【若い都会の女】
【人魚】
【MISERE REVI】



松田尚之「人魚」

企画展Topics 加越能の美術

—縄文から江戸時代までの名宝—

9月11日(土)～10月24日(日)



重文「秋野時絵硯箱」五十嵐道甫作

今年の企画展は「加越能の美術」です。今秋九月には「縄文から江戸時代までの名宝」と題して古美術作品を展示します。

北陸の地は大陸に近く、能登では渤海などとの交流が見られました。また畿内とはほどよい距離にあったことから、都風に流されない独自の文化が発達したことで知られます。

今回の展示では、古来加越能と呼ばれた石川、富山両県にゆかりの美術品を紹介し、それぞれの時代にあつて政治的、文化的に重要な出来事と考え合わせながら、地域への影響を検証し、文化的な独自性がどのように形成されていったかをみていきます。

原始から古代では、真脇遺跡出土の「縄文土器」、中能登雨の宮古墳出土の「神獣鏡」(重文)などから装飾の起源と宗教美術の夜明けをたどります。

中世にあつては、羽咋豊財院の「馬頭観音」(重文)や富山常楽寺の「聖観音立像」(重文)のほか、金沢心蓮社の「阿弥陀三尊来迎図」(重文)、輪島金蔵寺の「阿界曼荼羅図」(県文)など宗教美術が広がりを見せ、多様な展開を示している様子を見えていきます。また、美術工芸品では、白山比咩神社の「剣 銘吉光」(国宝)など藩主から奉納された名宝や、石川の生んだ画聖長谷川等伯の七尾時代の作品を紹介します。

江戸時代では、加賀藩前田家による文化政策によって美術工芸王国が築かれていった様子や前田家ゆかりの名宝と、加賀蒔絵、古九谷、茶の湯の道具などから紹介していきます。

本展とともに来春一月は「加越能の美術—明治から現代の絵画・彫刻・工芸—」として近現代美術を紹介することになっています。

行事案内

■講演会	午後一時三〇分～	美術館ホール	聴講無料
八月一日(日)		「九谷陶芸界における徳田家三代」	講師／嶋崎丞 当館館長
■ギャラリートーク	午後一時三〇分～	二階 第6展示室	要観覧料
七月二十四日(土) 八月二十一日(土)		「徳田八十吉三代展」	講師／四代 徳田八十吉氏

当館の作品が見られる展覧会

石川県七尾美術館

「土門拳の昭和」

七月三十一日(土)～九月二十六日(日)

「青手桜花散文平鉢」

「色絵鳳凰図平鉢」

「色絵石畳双鳳文平鉢」

(三点共、石川県立美術館蔵)

あわせて土門拳が撮影した野々村仁清作・国宝「色絵雄香炉」、「青手桜花散文平鉢」「色絵鳳凰図平鉢」「色絵石畳双鳳文平鉢」の写真作品を展示します。

石川県七尾市小丸山台一丁目一番地

TEL 〇七六七―五三一―一五〇〇

第四十一回 文化財現地見学ののお知らせ

本年度の文化財現地見学は、名古屋方面を予定しています。国宝茶室「如庵」をはじめ、徳川美術館、名古屋ポストン美術館、国宝 犬山城などの見学地を予定しています。詳細は九月号に掲載いたします。



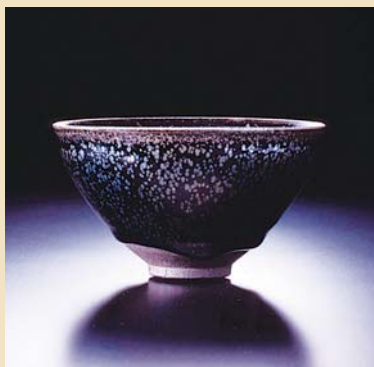
重文「馬頭観音立像」豊財院



県文「達磨図」長谷川信春 筆 龍門寺



重文「刺繍阿弥陀三尊像」西念寺



重文「耀変天目」財団法人秀明文化財団



重文「黒漆螺鈿鞍」白山比咩神社



重文「顔形把手付鉢形土器」能登町真脇遺跡縄文館

次回の展覧会

前田育徳会尊經閣文庫分館	第2展示室 (古美術)	第3展示室 (近現代工芸)	企画展示室
「加賀藩の美術工芸紙」	「秋の優品選」 一書跡を中心に	アメリカで活躍した日本人画家 「東 典男の世界」	「加越能の美術」 一縄文から 江戸時代までの名宝
会期:9月11日(土)～10月24日(日)			

石川県立美術館だより 第322号
2010年8月1日発行(毎月発行)

〒920-0963 金沢市出羽町2番1号
Tel:076(231)7580 Fax:076(224)9550
URL <http://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/>

8月は無休で開館しています